
パワパフガールズZVS謎の風雲児

暇つぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パワパフガールズZVS謎の風雲児

【Nコード】

N9913K

【作者名】

暇つぶ

【あらすじ】

出ましたっ！パワパフガールズZの最終話以降の話です。ガールズの前に現れた謎の転校生。彼はガールズへ闘いを求めてきた。

これよりガールズ対謎の転校生の死闘が始まろうとしていた。

この話は本編と比べて戦闘、残酷表現が多いです。ご注意ください。

変な転校生、安倍晴治

私立東京シテイ学園のももこのクラスに一人の転校生がやって来た。

「……………」

しかしクラスのみんなはなぜか黙りこんでいた。その理由は…

「へろへろ。僕ちゃんの名前は安倍晴治あべせいじて言うんだなあ。よろしくねい！」

転校生は少しおかしかった。両耳には星形のピアス、腕には星形のリストバンドをつけていた。

そののなにがおかしいかって？それじゃない、この異常なテンションだった。キーン先生もどうしていいかわからず、

「せっ晴治君は赤堤ももこさんの隣ね？あそこの女の子の隣。」

ももこは困った顔をした。

「うえへ、なんか苦手だよ、あれが隣に来るなんて…」

「ほいさ！あの子の隣ね。へえへめっちゃかわいいやん？」

しかし転校生、晴治はキーン先生の方へ向くと

ムニユ…

「キャア！」

「へへっ！少し大きいくらいかな！」

なんと晴治はキーン先生の胸を掴んだのだった。転校生として、いや、初対面の人にとってはあるまじき行為をした。

「……………」

クラスは騒然としていた。大概の人は変な奴が来たとは思っていない。ももこもそんな感じだった。

「あっあんな奴が隣に…いやだああ！」

ももこはかなり嘆き始めた。

それを見ていたみやこやかおるも

「あの人がももこの隣に…いやな予感がしますわ…」

「げっ…変な奴がももこの隣か…」2人ともため息をつくと同時に心の中では実は安心していた。

一限目 社会科

「zzz…」

「……」

晴治は居眠りをしていた。しかもいびきをかきながら…転校してきていきなり居眠りとは、大したものである。

すると

バン！

「むにゃ…どうしたんだ？」

すると目の前には先生が怒った顔で晴治を見つめていた。

「あなた、授業を聞く気がないの？なら授業に参加しなくてもよろしい！」

となりでそれを見ていたももこは苦笑いをした。

（この先生、怒ると怖いんだよねえ…）

しかし晴治は先生の顔を見てニヤッと笑った。

「センセ！あんまり怒るとシワが増えちゃうよ」

それを聞いた先生はカチンと来た。

「じゃああの問題を解いてみなさいよ？私の授業を聞かないのなら、黒板にかかれているのが分かるわよね？」

クラスみんなが晴治の方を見た。晴治は余裕な顔をしている。

「はいはい、どれどれ…」

晴治は黒板を見つめた。数秒間を置き、先生の方へ向いた。

「答えは○○○。ですよね？」

ギクッ！

瞬間に先生の顔が変わった。

「せっ正解だわ…」

ザワ…

クラスみんなはどよめき出した。今日習った所をさっきまで寝ていた奴が答えられるなんて…。さらに晴治は喋り出した。

「ちなみに○○○は□□□で△△△があったから…」

まるでコンピューターのごとく、晴治からはどんどん情報が出てきた。

それを聞いた先生はしゅんとなって教卓へ戻っていった。

みやこやかおるも驚きを隠せない。

「へえ…晴治君だっけ？すごいですね。」

「あいつはただのバカじゃねえみたいだな」ももこを晴治を見て、驚きを隠せなかった。

（すっ…凄い…一体何者？）

晴治はまた居眠りを始めた。

二限目 音楽

「指でつつかれたマン〇〇マン〇・カパック」

「……」

晴治はつボ〇〇リオの「イン〇帝国の成立」を熱唱していた。音楽

の先生はドン引きしていた。なぜならこの歌は完全に下ネタだからだ。

生徒もまだ分かる人もいればわからない人もいて、どよめきあった。 勿論、ももこ、みやこは前者、かおるは後者であった。

「うう…下品すぎる…」

「耳が腐りますう…」

「なんの歌だこれ？」

三限目 国語

「……」

晴治は外を眺めていた。しかし、もう誰も気にしちやいなかった。

ファンファン！

突然ももこ、みやこ、かおるの三人が立ち上がった。

「先生…頭が熱いのでちよっと冷ましてきます…」

「ちよっとお腹がいたいので保険室にいつてきます…」

「ちよっと右脚が脱臼したからちよっと保険室にいつてきます！」

あまりにも不自然な訴えに先生は少しポカンとした後、

「どっどうぞ…。気をつけて…」三人はすぐに飛び出していった。

それを見ていた晴治は首を傾げた。

（なんだあいつら…ちよっと気になるな…よし…。）

スッ…

晴治はズボンのポケットから人の形をした薄い紙を取り出した。それを机に置くと手を組み合わせ、ブツブツと喋り始めた。

晴冶の謎

「モ〜ジョ、モジョモジョ。久しぶりに悪さをしてやるモジョ！」
ガシン！

モジョ・ジョジョ：1数年前にケミカルZの黒い光を受けたサルが
今やこんな醜い姿になっていようとは…。

しかし、その恩恵は彼を喋れるように知能を増やしただけでなく、
飛行能力もついたスーパーモンキーであった。

今日も彼は悪のために働く。

ガシン！ガシン！

「今日はうってつけのモジョロボで東京CITYをめっちゃめっちゃに
してやるモジョ！」

モジョ特製のとおき巨大メカ「モジョロボ」に乗って街に向か
って進行中だった。

しかし

ドゴォ！

「がはっ！誰だモジョ！」

モジョロボに衝撃が走り、後ろを向くと三人の少女が空を飛んでい
た。

三人はそれぞれヨーヨー、ロッド、どでかいハンマーを装備してい
た。

「お前達は…！」

三人の少女はそれぞれ横に並ぶとポーズを取り出した。

「ハイパー・ブロッサム！」

「ローリング・バブルス！」

「パワー・バターカップ！」

「「戦う愛のサイエンスレジェンド！パワーパフガールズZ！」」

パワーパフガールズZ。彼女の正体はあのももこ、みやこ、かおるが変身した状態である。

モジヨと同じ時期にケミカルZの白い光を浴びて超人的な能力がついてしまった。

それ以降、黒い光を浴びて、モジヨと同じ超人的な能力がついた悪きモンスターを退治すべく結成されたスーパーヒロインである。

「パワーパフガールズZ！久しぶりモジヨな！」
モジヨはニヤニヤしていた。

「またあんた、悪さするつもりね。」
「あなたの思い通りにさせません！」
「その根性叩きのめしてやる！」

「うるさい！！今日こそオレの餌食にしてやるモジヨ〜！」
ジャン！

モジヨロボは腕を前に出すと、手の平から3つの穴が展開された。

「これでも食らえ！」

バシュ！

3つの穴からなんとミサイルが飛び出してきた。

「ミサイル！？」

スカッ！

ガールズはミサイルを難なく避けた。

ギューン！

「えっ！？」

なんとミサイル達が急旋回してまた戻ってきた。

「ぎゃははは！そのミサイルは追尾機能がついていて、狙った獲物は逃さないモジョー！」

「……………」

ももこは何かを考えている。

みやことかおるはずっと回避したままだ。

「しつこいですわ！」

「こいつをなんとかしないと…ももこ！」

するとももこは2人の所へ向かった。

「2人とも！いい考えが出来たよ！」

そうゆうとももこは2人を集めて耳元で呟いた。

「…それはいい考えですわ」

「よっしゃあ！」

すると三人はそれぞれ離れた。

「これで終わりだ！ガールズ覚悟だモジョー！」

しかし

「ん？」

三人はモジョロボを向かってきて、それぞれロボの背後に隠れた。ミサイルは三人を追って、モジョロボに向かってきている。

「もっもしや!？」

モジヨは気づいた。ミサイルは「三人」に向かっていることに。その三人は今、自分の背後にいることを。

「あたしたちの勝ちね、追っかけてくることはこんな使い方が出来ることを考えたからね！」

ミサイルはドンドンロボに近づいている。モジヨから余裕な顔はなくなった。

「ひええ!!！」

そして

コッソッソ!

ミサイルはロボに当たった。その瞬間にガールズはロボから離れた。

ドッカーン!

ロボは大爆発を起こし、モジヨは爆風で吹き飛ばされた。

「またまた失敗モジヨ!! 覚えておけえ!!」

モジヨは空の彼方に飛んでいってしまった。

三人は互いにガッツポーズを交わした。

「今日も街は救われたあ!!」

「いやあ! しかし、あいつももう少し頭が良かったらなあ」

「まあ、一件落着ですわ」

三人は地上に降りると、その場に座った。

「そういえばカレを封印してからひと月が過ぎたね？」

「そうですね。私達の力がなくなったかと思ったけど」

「この通り、まだ使えるしな。あとモジヨやファジーとか、まだ

モンスター化したのもいるし」

「まあ力が失ってないんだし、あいつらが来たらまた退治すればいいんだよ！なんたって『戦う愛のサイエンスレジェンド』なんだから！」

「そうですね！（そうだな！）」

三人の笑い声が響き渡る。

そして

「学校に帰ろっか？授業あるし？」

「そうだな」

三人は立ち上がり、飛んで帰ろうとした。

しかし

「あんたらやるねえ！」

「「「！？」」」

後ろから声がし、三人はびっくりして振り向いた。そこには…。

「あんたら、同じクラスの僕ちゃんの隣の赤堤ももこと…確か…誰だっけ？」

そこにいたのは今日、転校してきた変な奴、晴治だった。

「あなたは…転校生の…」

「なんで…こんな所にいるの…？授業は…？」

三人は不思議そうに晴治を見ているが、晴治はニヤニヤしていた。
「大丈夫！オレっちの代わりがちゃんと授業を受けているよお」

「代わり？」

三人とも意味が分からなかった。自分たちの姿を知っているの少なく、正体がバレたこともそうだが、なぜここがわかったのか不思議でならなかった。

「まあいいじゃねえか。あんたらそんな格好して、ヒーローゴッコかと思っただけだね」

するとかおるが前に出て、少し晴治を睨みつけた。

「お前、オレらになんのようだ？」

すると晴治はクスッと笑った。

「あんた、女なんに妙に男っぽいなあ。もしかしてち○ち○でもついてんじゃねえの？」

カァ：

三人とも顔を赤くした。

「んなワケあるかぁ！！」

（また下ネタ：。）

（もういやです：）

晴治は腹を押さえながら笑った。

「わりいわりい！用はねえがさっきの変なロボットとの戦いを見て、興奮しただけさ」

「えっ：？」

三人もポカーンとなった。

「いやあね、今まで暇で暇でしょうがなかったからさあ：どうしようかなと悩んでたんだよ。

そしたらよ！あんたらの戦いを見て久しぶりに興奮しちまったわけ

でさあ」

(なにコイツ…?)

(なんか…)

(オヤジクサイ…)

三人とも呆れた顔になった。

「それでにお願いがあるんだけどよお？」

「お願い？」

「ああ、あんたらと闘ってみたくなった。どうだ？対戦してみねえか？」

「「はあ？」」

三人ともワケが分からなかった。なんで見ず知らずの人と戦わなければならないのか、しかもこんな奴に…。

「大丈夫大丈夫！どうせ君達は僕ちゃんには勝てないんだから…楽しんでませてくださいだけでいいよ」

カチーン

その言葉がかおるの感に触れた。

「んだとお！もういっぺんにいってみる！」

「「かおる!？」」

ゴオオ！

かおるは持っていたマイ装備のハンマーで晴治に襲いかかった。

「オレ達に勝てるならこんな攻撃ぐらい余裕だよな!!」

かおるは晴治目掛けて、ハンマーを振り下ろした。力に乗ったハンマーの直撃を受ければ大怪我ではすまない。

「「危ない！（ですわ!）」」

2人が叫ぶ中、晴治はニヤニヤと笑っていた。

本当に甘ったらしいぜ

テ メ エ ハ ヨ オ ！ ！

っ…

「なっ…なにっ!？」

「えっ…どうゆうこと?」

かおるは驚いた。いや三人は驚いた。

「かおるちゃんだっけ? 君はかなりの力の持ち主だね。素の力じゃあオレより上だ。」

しかしな…そんなんじゃちっともオレっちに効かないね」

なんと晴治はかおるが力いっぱい振り下ろしたハンマーを指一本で止めていた。

「はあ…はあ…はあ…」

当のかおるは体が震えていた。今まで経験したことのない悪寒だった。

「見て、かおるの様子が…」

「どうしたんでしょうか…?」

ゴトっ…

かおるはハンマーを離すとそのままへたり込んだ。

すると晴治はガールズに背を向けた。

「3日後だ。3日後の午後のこの位置オレっちはいるから、戦いたかったらここにきてな：戦うか戦いたくないかはそっちの自由だけれど…」

オレっち的には戦ってほしいとこだけど…ね。見物人つけるのもよし、誰か助太刀を頼むのもよし、何でもありだからな。
じゃあそうゆうことでえ」

晴治は去っていった。

2人はすぐにかおるの本へ駆けつけた。

「大丈夫ですか！？かおる」

「しっかりしてかおる！？」

少し間を空き、やっと自我に戻ったかおる。

「あっ…ああ…」

「あいつ…一体何なのよ！？」

「なんか戦いは3日後のここって言ってましたよ？行くのですか？」

「……」

安倍晴治…。謎の風雲児。

今までのモンスターや悪人と違った感じがしてならなかった。

決闘！ガールズVS晴治 その1

3日後の土曜日…。

指定された場所でガールズは晴治の前に立っていた。

「ありがとね♪君達は逃げ出すと思ってたけどね」

晴治は相変わらずニヤニヤしている視線に、

「あの時のお礼をしてやるぜ！なっつたって助太刀とかありなんだろう？」

かおるが目の色を変えて叫んでいた。

「まあまあかおる、落ち着いて！」

「そうですわ。」

かおるを心配そうになだめる2人。

その横で対決を見ている2人の人間がいた。

「あの子が晴治君か…。あの子達に決闘を申し込んだのは…」

「そうみたいですわね。あの人からあんな自信がくるのか興味深いですね」2人の名はユートニウム北沢博士とその息子、ケンだった。

東京CITYの「国際科学研究所」に働く博士でケミカルZの開発者。

三人をあのか姿にしたことに責任を感じている。ケン子供ながらにして頭がよく、父親の助手をしている。あとピーチという彼女達が変身するために必要なデジタル犬がいるが今日はお休みのようである。（もっとももう彼女達は変身した状態で来ているため、いいにいいが…。）

「ふむ：かおる君の本気のハンマーを止めたのは気にかかるな。しかも指一本で」

「なんか科学的理論でも使ってるのかなあ…」

2人がぺちゃくちゃ話をしている間にガールズと晴治の対決が始まろうとしていた。

三人はそれぞれの武器を持って構えるが、晴治は無防備のまま突っ立っているままだった。

すると晴治は口を開いた。

「戦う前にあんたらに質問するけどね？」「戦闘」：いわゆる戦いをどう思ってる？」

三人は突然の質問に戸惑う。

「戦いっていつでも女の子だし考えたことがないよ…」

「そうですわ」

「戦いは熱き力同士のぶつかり合いだろ！」

かおるだけは威勢よく答えた。

それを聞いた晴治はニコツと笑った。

「あははは！なるほどね。かおるちゃんの見解は分かるよ。

しかしの本当の意味があるんだよ。それは知ってほしいなあ」

すると間を置いて晴治はこう話した。

「戦闘はね、合理的に人を殺せる最高のゲームなんだよ。」
！！？

ガールズや博士達は驚いた。「人を殺せる最高のゲーム」という中学生、いや人間として言うべきでない言葉を平然と言い切ったのだから。

「あんた何考えてんのよ！？」

「人を殺すとか酷いことを言っではいけません！」
「頭狂ってんじゃないのか!？」

みんなが非難する中、晴治はまた口を出す。

「また言うけど君達が僕ちゃんに勝てるどころかダメージすら与えられないよ。」

なぜならこの地球がある限り、オレっちは無敵だからさあ。ちよつとは楽しませてくれよ♪」

? ?

「はっはあ?」

「地球がある限り…」

「どうゆうことだよ!？」

三人とも意味が分からなかった。無論、博士達でもある。

「地球がある限り…どうゆうことだ?」

「……」

そして

「じゃあ始めよか?そこのおじさん達も手助けしたかったらいつでもどうぞ。あと危なくなったらストップかけてね。」

一応手加減はするけど死んだら意味ないだろ?」

「なっ…なんですってえ!？」

あまりにもガールズをナメきった態度に本人達も気が立ってきた。

「よしもここ、みやこ、いくぞ!あいつにオレ達の力を分かせてやる!」

「「うん!（ええ!）」」

三人は同士に空に飛び出した。

「空から攻めるかぁ♪そうこなくちゃ!」

先陣を切るのはももこと、『ハイパー・ブロッサム』。

「シューティングヨーヨー!」

ハイパー・ブロッサムの固有武器であるヨーヨーは非常に特殊である。

ワイヤーがかなり頑丈でかなりの長さがある。しかもワイヤーも再生するというオマケ付き。

ゴォ!

上空から投げたヨーヨーが物凄いスピードで晴治に向かう。

「ふんっ! ヨーヨーとは面白い武器持つてんねえ?」

ガシッ!

晴治はヨーヨーを受け止めた。

「やっぱり、ただの人間じゃないわね!! もしかしてモンスター?」
普通の人間なら受け止められないヨーヨーを晴治はいつも容易く掴んだ。

「父さん! あの人はモンスター?」 「いやっ、黒いオーラは出ていないし、このケミカルZセンサーに反応しない。普通の人間だよ」

「何だって? じゃああの人は一体...?」

博士達は疑問になりながら決闘を追っていた。

次に出てきたのはみやこと、『ローリング・バブルス』。

「いきますよ、バブル・ポップー」

ローリング・バブルスの固有武器であるロッドはシャボン玉を発生させ、身を守ったり、相手の動きを止めたりと、攻撃というより後

方支援的なものに使える武器である。

ロッドから巨大なシャボン玉を晴治の正面で発生させた。

「何だこのシャボン玉は？」

右手はヨーヨーを受け止めているため、左手をシャボン玉に触れた。

パン！

シャボン玉ははじけ、晴治周辺に衝撃が走る。

「っ……。なる程な。そうゆう技かあ……」

しかし晴治は踏ん張り、体勢を整えようとした次の瞬間。

「油断しすぎだ！」

目の前にはかおること、『パワード・バターカップ』が固有武器のハンマーを振りかざした。

ハンマーから出るパワーは並み大抵のものではなく、かおるの力も相まって、3人の中で一番破壊力が高い。衝撃波も打てるという優れもの。

「くらえ！メガトン・ Dank！」

かおるはハンマーを力いっぱい振り下ろした。

「ちっ！」

晴治はなんとかすれすれでハンマー攻撃から回避した。

しかし

ドゴオ！

振り下ろしたハンマーは地面を叩きつけ、衝撃が地面を走った。

「くっ！」

「うわあ！」

博士達も衝撃に翻弄される。

幸い、ここは街から離れた所にあり、人がめったに來ない場所だったので大したことはなかった。

晴治は少し驚いた表情でいた。

三人は地上に降りて、構えた。

「これが！」

「私達の力です！」

「どうだ！オレたちの力を甘く見るなよ！」

これぞ、パワーパフガールズZの連携である。これにより、数々のモンスターを退治されたのである。

「どお！これでもまだやる？さすがに一人だとキツいんじゃない？」
ももこが強気で言い張る。

しかし晴治はニヤニヤしていた。

「面白いわぁ…あんたらの力を見くびってたよ。じゃあ今度は僕ち
ゃんからいこうかな？」

すると、

ユラ…ユラ…

「ん？」

晴治は脱力させたように体をゆらゆらと揺さぶり始めた。

「何あれ？」

「なんでしょうか？」

「おい！ふざけてるのか？」

三人なワケが分からず、ポカーンとしていた。

博士達にもワケが分からず、

「何ですかあれ、あれってただ揺れているだけじゃないの？」
「うーむ…とりあえずガールズ、油断はしないでくれ！」

…と言っても晴治はただ揺れているだけであつた。何をするかも知分からず。

「何かワカメみたいだね？」

「ワカメだって、ワハハハハ！」

三人は笑っていた。

次の瞬間

ヴォン！

！ ？

なんと揺れていただけの晴治が突然姿を消した。

「えっ!？」

ゴオオ！

「「「きゃあああああ!!!（うわああああ!!!）」」」

突然、三人に物凄い打撃の衝撃を受ける。しかも一発ではない、無数の打撃がガールズに襲いかかった。

これを見ていた博士達の顔色を変える。

「ああ!？」

「三人とも大丈夫ですかあ!？ 父さん、これは!？」

「……」

シュン…

晴治が姿を現した瞬間、ガールズは地面に倒れこんだ。
晴治はいつも通りにニヤニヤ笑っていた。
「そっちこそ油断しすぎだよ？」

決闘！ガールズVS晴治 その2

倒れるガールズと顔色を変える博士とその息子ケン、そして余裕な表情でニヤニヤ笑っている晴治。

「はあ…はあ…ぐう」

「なっ…何したんだよ…」

傷ついたガールズは少しずつ立ち上がり、晴治を見た。

「教えてやろうか？あれはただ揺れてた訳じゃない、瞑想してたんだよ。」

「めい…そう？」

「ああ、体を脱力させて揺れていると精神を研ぎ澄まされるだよ。そうすることにより、目標物へ一転集中し、そのまま100メートルを二秒で走るほどの超高速で君達に攻撃したのさ」

！ ！ ？

全員が驚いた。普通の人間が100メートルを二秒で走るなんて絶対に無理な話だった。

「なっ…何ですって…？」

「嘘だ！普通の人間が二秒で走れるワケがない！」

ケンが叫ぶと、晴治はケンを見つめた。

「嘘だって？じゃあさっき見せたあれはなんだ？夢だといいたいの？そんな根拠もないのに否定されたくないね」

「ぐう…」

ケンは後ずさりして、こらえた。

「ケン…」

ユートニウム博士はケンの両肩に手を置く。

晴治はガールズを見て、ため息をつく。

「君たち、さっきまでの威勢は何だったんだ？」

「まっまだまだよ！いけるわね？」

「ええ…っ！」

「ああ！」

三人は再び構えると、晴治に突撃した。

「ちよっと遊んでやるか？しかも豆知識も教えながら…。」
スッ…

晴治はポケットから何かを取り出した。

「！？」

「かっ…紙！？」

晴治が取り出したのは三枚の人型に切り取った薄い紙だった。

「くらえ！」

シュバ！

晴治は紙をガールズに向けて投げつけた。

「なっ…何これ？」

「変な紙ですわ」

紙は三人にまわりつくつくと五芒星の方陣を三人の周りに描いた。

次の瞬間！

バリバリバリバリ！！

う あ あ あ あ ！ ！

「ガールズ!!?」

「ああ!」

三人の悲鳴が響きわたる。電撃みたいなものがガールズを襲った。

バタツ!

ガールズはその場に倒れる。彼女達からは黒い煙が立ち込める。

「なん…なのよ…これ…?」

「てめえ…何をしやがった?」

ニヤニヤしている晴治にユートニウム博士が喋り出す。

「晴治君…だったね? 君のその力はもしかして…?」

「おじさんは気づいた? じゃあ君達にも教えてあげようか? 僕ちゃんの楽しい楽しいお勉強タイムだ」

晴治はポケットから紙を取り出し、ガールズに向けた。

「さっきの紙…?」

「なんですか? それは…?」

晴治は紙を宙に離すと紙はまるで意思があるかのごとく、浮き、動いていた。

「!!?」

「それ…ただの紙じゃないですわ?」

「なんだそれは!?」

晴治はおもむろに口を開いた。

「これは『式神^{しきがみ}』と言うんだ。

紙や草でも何でもいい、取りあえず何かを身代^{かたしろ}にして、命を吹き込み、術者の思い通りに行動させる術だ。」

? ? ?

「はあ？」

「何のことかさっぱり…」

「博士、どういう意味だ？」

ガールズはさっぱりワケが分からなかった。

ユートニウム博士は驚きも隠せずに口を開いた。

「ああ、大学時の文献で見たことがある。君が使っている技、式神は間違いなく陰陽道の技…。

てことは君は…陰陽師か？」

! ! ?

「おっ陰陽師!？」

「陰陽師っていったらアニメやマンガに登場する…」

「あの陰陽師って奴かよ!？」

「パパ、嘘でしょ!？陰陽師って嘘の話じゃないの!？」

誰も信じられなかった。何故なら陰陽師なんてアニメやマンガの世界だけの人物だと思っていたのだから…。

「おじさんが正解!けどね、分かっているいな?僕ちゃんの名前は

「安倍」って言うんだけど、何か思いつかないかな?」

「えっ!安倍…安倍…安倍晴…もっもしかして!？」

一番早く気づいたのはユートニウム博士だった。

「きっ君はもしや…あの有名な…」

晴治はニヤつとした顔で口を開けた。

「その通り、オレっちは平安時代に名を馳せた大陰陽師「安倍晴明」あべのせいめいの直系の子孫だよ！」

！ ！ ？

この言葉を聞いた瞬間、全員が耳を疑った。

「安倍晴明ってあの…」 「アニメとかに出てくるあの陰陽師ですか？」

晴治はまた口を開ける。

「家も平安時代から代々受け継がれてきた陰陽一族で、物心ついた時から陰陽道のスパルタ教育を受けたから陰陽術は僕ちゃんの得意分野！」

あと、オレっちがいつも付けているピアスもリストバンドも、形は安倍家のシンボル「五芒星」だよ！」

晴治は声高らかに自慢した。

「陰陽師が何だってゆうのよ！」

「こちらには科学の力がありますわ！」

「ああそうだ！その式神とかごと、お前を吹き飛ばしてやる！」

ガールズは立ち上がり、気合いを出した。そのオーラはこちらまで伝わってくる。

「そうこなくちゃな？そうしてくれないと面白くないなあ」すると、また晴治はまた紙を取り出した。

「また式神！？」

「一端、空中で回避するんだ！」

ガールズは空に飛んだ。そしてそれぞれバラバラな位置に展開した。

しかし

「あれっ！いない！」

晴治は姿を消した。周りを見ても彼の姿がどこにもいない。

「ヤロー！どこにいった」

どこを見渡しても彼の姿がどこにもいない。しかし、

「ガールズ！後ろだ！」

突然ケンが叫び、ガールズはすぐに後ろを振り向いた。

そこには

「あんたら俺が空を飛べないとも思ったか？」

！？

「なっ何ですって！？」

ガールズを挟んだ所に晴治がいた。しかもガールズ同様、空を飛んでいた。

「何あれ！？」

ガールズが見たものは宙に無数に散りばめられた式神用の紙の大群と真ん中に腕組みしている晴治の姿があった。

「式神にはこんな使い方も出来るんだ！くらえ！」

すると晴治は体を丸めて叫んだ。

「式神ミサイルフルバースト！全方位全弾発射！！」

次の瞬間、

シュババババ！！

無数の式神が全方位に一斉に放たれた。

ズオゴオオ！

無数の式神が一斉に爆発し、辺り一面を爆風で覆う。

ガールズは爆風をくらい、必死に耐える。

「ぐっぐうう！」

「ひゃあああ！」

「いぎいいい！」

地上も無事ではなかった。辺りに式神の爆撃が広がる。

「ケン、危ない！こっちへ！」

「うわああ！！」博士達はすぐその茂みに体を隠した。

式神の単発の爆風は大したことはない……。が小型爆弾並みの爆風と威力をもち、さらにそれが数百：数千程の数が一斉に放たれたのだからたまったものではない。

数分後。

爆発は収まった。

「みっみんな…大丈夫？」

「ええ…」

「オレも何とか大丈夫だぜ？」

互いの無事を確認したガールズは辺りを見渡した。

「ひっひどい…」

「あんまりにも程があります…」

辺りはほとんど焼け焦げ、見るも無残な光景になっていた。

博士達も爆発が治まるとすぐに飛び出してきた。

「こっこれは…」

「ひっひどい有り様だ…。」

博士達は愕然とした。元々ここは東京cityの中でも緑が多く、自然に溢れていたのだがさっきの攻撃で焼け野原となったからだ。

「ちょっとやり過ぎたかな？ まっ気にしない気にしない！ ワハハハハっ！」

晴治は地上で豪快に笑っていた。

「少しは気にしなさい！」
ももこがツツコミを入れる。

「ところでもつとやる？ これじゃああんたらが余りにも不利すぎて面白くないよ」

「まだだ！ まだ勝負はついてない！」

晴治がそうゆうがガールズ、特にかおるはそれを否定する。

「じゃあ式神とか陰陽術は使わないよ。もつと見せてあげたい所だけど、あまりにも君らが話にならないから今度はこの拳で楽しませてやるでい」どこまでもナメきった態度…。そんな晴治をガールズ達が許すワケがなかった。

「もういい加減にしなさい！ あんたなんか私達がけちよんけちよんにしてあげるわ！」

ガールズは熱くなり過ぎている。それを見て博士とケンはあるつけを取られる。

「ももこさん達…大丈夫なんですか？」

「うーむ…」

（しかし…仮に陰陽道を使用しないとしてもあの自信はどこから来るんだ？あと「地球がある限り無敵」とはどういうことなんだ？）
ユートニウム博士は不思議でならなかった。

ガールズは武器を構え、横に並んだ。

「こうなったあたしたちの攻撃を一気に与えるわよ！」

「ええ！」

「うん！」

まずももこが前に出て、ヨーヨーを振り上げる。

「行くわよ！」

シュルルル！

次にみやこ、ロッドから沢山のシャボン玉を発生させる。 「バブル・シャンペーン！」

最後にかおる、ハンマーを振り上げ、渾身の力で振り下ろした。
ドゴオオー！

「グラビトン・ドライブ！」

叩きつけた際に生じた衝撃波が晴治に向かって地を這う。

これらの技が3つに重なる時、三人合体の超強力な技が完成する。

「「トリプル・サイエンス・アタック！！！」」

ゴオオオオウっ！

巨大なエネルギーの塊に包まれたヨーヨーが晴治を襲う。

「「「いっけえ！！」」」

もしこれが効かなかったら：いや効かないワケがない、何故なら科学の力が生んだ三人の絆が生んだ必殺技なのだから：。

「……」

晴治は黙り込んでいた。しかしその顔から笑いがこぼれた。

「なかなかの技だ。しかしな、オレは無敵と言ったろ？」

次の瞬間！

ボシュン！

！ ！ ？

攻撃は晴治の目の前でかき消された。ガールズの顔色が悪くなった。

「なっ：私達の必殺技が：」

「効かなかったですわ：」

「なっ何故だ！？」

こればかりには博士達もあっけを取られた。

「なっ：何だって！？ガールズの力が通じない！？」

「どっどうゆうことなんだ：。陰陽道は使わなかったハズなのに：。

」

晴治はあくびをしていた。いかにもつまらない攻撃だったかのよう
に：

「ふあああ！だから言っただろ？オレっちは地球がある限りは無敵だ
って？」

晴治は今度は攻撃の構えに移行した。

「不思議そうな顔をして：わかった、教えてあげよう！！」

この地球が存在する限り、オレの能力は『300%』発揮される！」

次の瞬間、

ドオオ！

「「「！？」」」」

凄まじい程の威圧感がガールズを襲った。

決闘！ガールズVS晴冶 その3（前書き）

この話は専門用語が多いので注意して下さい。

決闘！ガールズVS晴治 その3

ゴゴゴゴ！

晴治からは物凄いオーラが流れてきている。

全員がその威圧感に翻弄される。

「なっ何？この嫌な感じは…？」

するとかおるがハンマーをもう一度振り上げてた。

「まだだ！グラビトン・ドライブ5連発！」

ドゴオ！ドゴオ！

地面を5回叩きつけて衝撃波を5つ発生させた。

しかし

「無駄でえ〜」

ボシュン！ボシュン …

またもやかき消されてしまった。

「見本を見せてあげるよ！」

晴治は拳を上げると渾身の力で地面に叩きつけた。

ズドオオオ！グラグラ！

「きゃあああああ！」

「いやあああ！」

「うわあああ！」

何と地上が揺れ始めた。強いってもんじゃない、東京cityにも影響がある程だった。

「ガールズの技が効かない、素手である威力：彼は一体何者なんだ？」

博士達は揺れに翻弄されながらも、不思議で仕方がなかった。

数秒後、やっと揺れが治まる。ガールズはその場に膝をつき、目を回していた。

「もうなんなのよ」

「目がフラフラですわ」

「オレ達の技が効かないなんて」

晴治はガールズの前に立っていた。

「じゃあまたオレっちからのお勉強タイムだ♪」

「えっ!？」

ガールズは見上げると晴治はガールズを不敵な笑みで見つめていた。

「君達、『八卦』^{はっけ}って知ってる？」

「? ?」

晴治はまたワケの分からないことを質問した。

「八卦？」

「八卦ってあの栄養が足りなくなってしまうあの？」

晴治は笑った。

「ワハハハハ！いいギャグだな。それは脚気^{かつけ}だ。僕ちゃんが言っているのは八卦！」

するとケンが喋りだした。

「八卦とは古代中国から伝わる方位を表した図形のことですよね？」
さすがはユートニウム博士の息子だけあって頭が良かった。

「君、よく知ってるね?」「爻」と呼ばれる2種類の線を組み合わせたら8つの『小成卦』が完成する。ようは方角を表した図形だ。」

? ? ?

「はあ?」

「全くわかりませんわ」

「お前、オレたちになにをしようとしてるんだよ!」ガールズは全く話についていけなかった。いきなり古代中国の話をされても…であつた。

「人の話は最後で聞けつて!小成卦つてのは『天・地・人』を表す爻の3本線で、それぞれの方角にはまた違った性質や意味がある。それら組み合わせると『大成卦』になり、その六十四卦を使い、昔の人は占いをしたんだよん」

晴治は知識をペラペラと喋り出す。

「その占いとなんの関係があるのよ?」

「そこで問題♪その八卦を利用して現在でも利用されているのは何でしょうか?」

「「「?」?」」」

すると

「『風水』か?」

突然、博士が答えた。

「風水?」

「風水ってあの?」

「この方角に水晶を置くとかトイレの方角とかなんやらとかに使うあれか?」

「大正解。その風水だよ。あんたらの技が効かないのも実はその風水を使っているおかげなんだなあ」

！ ！ ？

「風水が：あたし達の技を効かなくしている！？」
「どうゆうですか？」

晴治はニヤニヤしながら答えた。
すると

「そっそうゆうことだったのか：わかったぞ！」

「パパ？」

「博士！？」

博士が突然叫んだ。

「君が「地球が存在する限り、無敵」の意味がようやくわかった！」
！！ ？

全員が驚いた。

「おじさんは気づいたようだね？ よしみんな、オレっちの秘密を教えてあげる！」

晴治はその場に座りこんだ。

「風水にもさっき使った陰陽道にも「五行思想」と言うものがあるってねえ。」

「五行思想？」

「何ですのそれ？」

「この世の中のありとあらゆるものは「火、水、土、金、木」の五行の概念で成り立っているという教えだよ。それらはそれぞれ陽と陰、ようは表と裏の性質があるんだ。」

つまりそれを利用すると陽を表す『五行相生』、いわゆる「木は火

「くう…」

ガールズは話疲れて寝ていた。博士達はそれを見てポカーンとしていた。

「そっかあ…聞く耳持たないか…」

すると

ズドオオオ！グラグラ！

「ぴい！？」

「また地震！？」

「うわあ！」晴治はまた地面を揺らした。

晴治はニコニコした顔で言った。

「人の話は最後まで聞けっていったやろお？
次に寝ているとマジで殺すよ？」

ゾクっ！

ガールズに寒気が襲った。

「はいはい…」

「わかりましたあ…」

「聞けばいいんだろ！聞けば」

すると晴治は話を進めた。

「もうすぐ終わるよ。ようは風水と気を組み合わせたらどうなるかな？」

「うーん…分かんない…」

「つまり、君達が使ってきてる技や攻撃Ⅱ気で置き換えたらそれに相反する気を作り出し、ぶつけて相殺させることによってあんたらの全ての攻撃や技を無効化出来る。」

！ ！ ？

「なっ何ですって！？」

「それじゃあ！？」

「オレらの全ての攻撃が通用しねえのかよ！？」

全員が驚いた。やっと理解したようだ。

「そうだ。オレっちは独学で風水術を学び、陰陽道と重ね合わせてアレンジし、地球上全ての方角の性質、意味、そして気を読み取る術を手に入れた。

そして各方向に位置する気を自分の力として無限に取り込み、増幅させる技を編み出した。

重ねて様々な拳法も学び、風水術と組み合わせた格闘術も編み出した。

名づけて「陰陽風水師」。森羅万象を自由自在に操り、宇宙の息をも味方にする者。

あんたらの前にいるのは「宇宙」そのものであると知り、そして地球がある限り、絶対無敵であると知れ！！」

ポカーン

全員が開いた口が塞がらなかった。

「風水と陰陽道は起源は同じ八卦を利用している。風水でも戦闘で用いれば驚異的な能力になるのさ！ちなみにオレっちが使ってる小成卦は陰八卦：つまり、守護八卦のことを言い、ありとあらゆる攻撃や外界からの影響、そして殺気から守ると言われている」

するとユートニウム博士が無表情で前に出た。

「君の勝ちだ…この子らに勝ち目がない。」
！ ！ ？

全員が驚いた。まさかユートニウム博士の口から負けという言葉が出るなんて誰も思っていなかった。

「はっ博士!?!」

「降参ですか？」

「何を言っているんだよ！オレたちはまだ…」

しかしユートニウム博士は話を続ける。

「いや！君らの能力より彼の能力が遥かに上回る。これ以上やっても無様な結果になるだけだ」

「パパ！ガールズは負けませんよ！絶対に」しかし

「何度もうが無理は無理なんだ。彼はな、我々の予想を遥かに超えた力の持ち主だ。その気になれば彼は全世界を滅ぼしかねない力を持った少年なんだぞ！」
！ ！ ？

ガールズやケンは驚きを隠せなかった。

晴治も博士に続いて喋り出す。

「確かに、陰陽道はその気になれば地球上に天変地異を起こせるし、風水は核の放射能さえも遮断できるからな。そしてオレの素手の一撃はヘタすりゃ東京cityをも壊滅に追い込めるな」

ドサッ：

それを聞いたガールズは膝をついた。

「そっそんなあ…」

「初めての…敗北…なのですか…?」

「ちくしょおお！あんな奴に負けるなんて！」

悔しがっているガールズを前に、晴治は三人に向かった礼をした。

「ありがと。君らのおかげで楽しかった。もう戦うなんて言わないよ、それじゃあ。」

そうゆうと晴治は去っていった。気づいたらもう夕方になっていた。

ガールズは悔しくて悔しくてたまらず、涙がこみ上げてきた。

「」「うわああああん!!!!」「」

三人は一気に大泣きし、辺りに響かせた。

「皆さん……」

ケンも物悲しくなり、涙がこみ上げてきた。

ユートニウム博士はそんな4人に暖かく見守った。

「君達はよくやった。正直私も驚いた。彼の強さは本当に異常だ。そんなに気にすることないよ」

ユートニウム博士はガールズ達をなだめる。

赤い夕日に染まる東京cityはいつもよりきれいに見えた。

ちょうどその頃、研究所では……。

「地震だワン！地震だワン！」

ピーチが地震に感知して、研究所内を走り回っていたとき。

ラウディラフボーイズ再び！

あの決闘から数日が経った。

学校内でも晴治は相変わらずいつもの調子だった。

しかし、少し困ったところもあった。

例えば休み時間。

「ちょっと晴治君、今日はあなたが当直でしょ？ 黒板消しなさいよ！」

女の子が注意するが、晴治は面倒くさそうな顔をしていた。

「はいはい…面倒くさいなあ」

渋々黒板を消す晴治。これならまだいいが…、

昼休み。

「キャア！」

晴治は女の子のスカートのめくりで夢中になっていた。

「へえ、いちごパンツかぁ？ かわいいな」

…等の様々な奇行をやらかしていた。

こんな調子だから、転校してきてから一週間ぐらい立っているにもかかわらず、友達が出来なかった。ただ唯一絡んでくるのが。

「ねえあんた、友達作る気ないの？」

「そうですね！ いつも一人で大丈夫ですよ？」

そう数日前決闘したももこ達であった。結果的に敗北したが、学校生活では普通の人間同士だったからだ。

帰り道、一人でトボトボ帰っていた晴治を心配して、ももこ達が来てくれたのだった。

「君らは君らで遊べばよくね？オレはオレで1人でするし。オレはつるむのは好きじゃねえんだ。」

「私達はあるたを心配して言ってるのよ！」

「学校じゃ、あんな調子だけでもしかして友達作り苦手なんじゃねえか？」

晴治は少し不機嫌そうに言った。

「うるせえな、オレっちは不自由が大嫌いなんでえ、オレっちはオレっちのやりたいようにやる！それがポリシーなんだよ」

そうゆうと晴治はそそくさと帰っていった。

三人はため息をついた。

「はあ…なんかあいつに負けたのが信じられなくなった」

「なんか後ろの背中が悲しく見えますわ」

「ふん…せっかく心配してんのに…」

次の日、国際科学研究所ではユートニウム博士達とももこ達と一緒にテレビを見ていた。

「あゝあ、最近面白いことないかなあ？」

ももこは好物の甘いケーキを食べていた。

「ところであの晴治君とはどうしたんだい？」

博士が聞くと、三人はため息をついた。

「あいつ、友達を作ろうとしないのよ。」 「何でも友達作るのは好きじゃないみたいで。」

「しまいには不自由が嫌いだから自分のやりたいようにやるって言出したんだよ。」

さすがの博士達も苦笑いする。

「なんとゆうか…変わってますね」

「一匹狼か…それは大変だな…ははっ…」

「しかも学校で変わったことすんのよ？女の子のスカートめくったり、まるであのボーイズと同じだわ」

ももこがケーキの最後の一切れを運ぼうとした。

「すみませんね！変なやつで」

「謝ればよろし…えっ!!?」

！
！
？

「「「うわあああ!!」「」」」

さっき話していた本人、晴治が横でテレビを見ていた。
全員がびっくりして飛び上がる。

「あっあんた！いつの間にここにいたの!?!」

「えっ、さっき来たばかりだけど？」

「ならチャイムぐらい鳴らせ！」

「はいはい！」

「びっくりしてお茶こぼしちゃいましたよ」

すると

「晴治君、一体何の用があってきたんだ？」

博士が尋ねると晴治は周りを歩きながら答えた。

「あっ忘れてた。さっき陰陽術を使って占術をやったんだけど、10分後の丑の方向に事件が発生するってお告げが出たからそのことをいいに來ただけ。」

君ら「パワーパフガールズZ」という正義の味方なんだろう？だから教えに來たんだ」

「えっ！？事件！？」

「陰陽道ってそんなこともわかるんですか！？」

全員が感心していた。嘘のように思えるようだがあの決闘であのよ
うな光景を見ては、信じたくなくても信じてしまうのであった。

「じゃあオレっちは行くね。あと面白そうだから見物に行くわ。」

晴治はそのまま研究所から去っていった。

「見物って見せ物じゃないのに…」

「丑の方向って？」

「丑は昔の言葉で色々な意味があるけど、方向だったら…北東微北
…商店街の方向だな」

十分後…。

研究所に一つの映像が入る。東京cityのメイヤー市長だった。

「大変だ！東京cityの商店街で事件が発生した。至急、ガールズ達に出動…」

するとユートニウム博士が苦笑いしていた。

「市長、もうガールズは出動しました…」

「へっ？」

メイヤー市長はワケが分からなかった。
東京cityの商店街…。

「キャア！」

「イヤン！！！」

女性達が悲鳴を上げる。その理由は…。

「いいパンツしてんじゃねえか？」

「ブリック、今度は僕ちゃんにやらせて！」

「今度はオイラにも！」

ブリック、ブーマー、ブッチの三人の子供がたわいないイタズラと悪さばかりしていた。

彼らは『ラウディラフボーイズ』。モジヨによって造られた子供…

いや、ミュータントと言った方が正しいか。

ももこが使用したストロー、みやこが使用した耳垢付きの綿棒、かおるの使用した脱ぎたての臭い靴下という負のオーラをベースに作り上げた。

三人とも悪ガキなのが特徴でたわいないイタズラがしばしば…だが、ガールズ同様、超人的な能力の持ち主達である。

「また、あんたたちの仕業ね！」

ガールズがボーイズの元にやって来た。 「お前達かよ！？今日は何か早かったな？」

「そんなことはどうでもいい！今日もお仕置が必要だな！」
かおるが手をバキバキ鳴らす。

「オイラ達こそ、今日はどんな嫌がらせをしてほしい？」

ガールズVSボーイズの火ぶたが切って落とされようとしていた。

しかし、

「始まってんねえ。つかなんだこのガキ共？」

「!？」

全員が横に見ると晴治がニヤニヤしながら座っていた。

「誰だあいつ？ブーマー、知ってるか？」

「僕ちゃんが知るわけないじゃあん？」

ボーイズが不思議になって晴治を見ていた。

「やっぱり来てたの？」

「面白そうだからな？邪魔しねえし」

ももこは呆れ返っていた。

「早く帰れ、見せ物じゃないぞ！」

「人がせっかく事件とか教えてやったのに薄情やなあ」

ガールズと話している内、ボーイズが痺れをきらす。

「そこのお前、この女の仲間か？」

「仲間？違うよ、ただの見物人だよ！てめえらがどんなチャンバラをするのか見たくてね」

するとブッチが前にでた。

「オイラ達の邪魔すんだったらタダじゃ置かないよ」

「うるせえ、なんか女くせえぞお前？」

「なっ何い!？」

触れてはならないキーワードだった。彼らは「女」を馬鹿にするが、それが弱点でもあるからだ。

「女くさいとか言うな!」

しかし、晴治は笑いながら連呼してみた。

「単細胞、オバカちゃん、女々しい!」

「「くうう!!」」

ボーイズは顔を真っ赤にして怒っている。ガキっぽい証拠だ。

「ちくしょう! あいつを先にぶっ飛ばす! 二人共いいな!」

「「うん!」」

ボーイズの目標が晴治に向かれた。

呆れてみてたガールズに晴治は口を開く。

「なんかオレっちから狙われてるし、どうする?」

「じゃあもうあんたが相手して:」

ももこがそう言うのと晴治は意気揚々となった。

「よっしゃ、せいぜい楽しませてくれよ!」

ガールズはため息を出す。

「あいつらもかわいいそう:」

「晴治君には:」

「攻撃が通じないからな:」

この後、最悪の事態が起ころうとは晴治以外は誰も分らなかった
…。

ラウディラフボーイズ死す！陰陽風水師の狂気の力！？ その1（前書き）

残酷な表現があるので注意してください。

ラウディラフボーイズ死す！陰陽風水師の狂気の力！？ その1

数分後

ズサー！

三人は体中ボロボロになっていた。

「なっ何て強さだ？」

「僕ちゃん達の攻撃がっ…」

「通じてない…？」

驚きを隠せないボーイズの前に晴治は手を払いながらため息をついた。

「やっぱこんなもんかあ？ガールズより弱いなあ！」

ガールズは予想通りになり、呆れていた。

「もう晴治に任せよっかあ…？」

「そうですわ…」

ボーイズは後ろに後ずさるが晴治は歩きながら追い詰める。

「こうなったら、それでも食らえ！」

三人はそれぞれ、唾つきストロー、耳垢付き綿棒、臭い靴下で一斉に放った。材料の影響なのか、こんなふざけた固有攻撃になってしまったのである。

しかし

スカッ！

晴治は難なくよける。呆れた表情でボーイズを見る晴治。

「汚ねえことばっかして、何がしてんだ？」

「ちっ！」

すると晴治が口を開いた。

「お前ら、一体何がしたいんだ？こんなしょうもないことばかりして」

その言葉にブリックも反論する。

「悪さだよ！オレは悪役をめざしてんだよ！だからどうした？」

「悪さか…。お前じゃ無理だわさ」

「何い？」

晴治はブリックを否定し、怒りをあらわにする。

「なんで無理なんだよ！？」

すると晴治は辺りを見渡し、ちょうどそこにいた子供と犬が遊んでいる所に指を指した。

「お前ら、今すぐあの子と犬を殺してこい！」

！ ！ ？

全員が驚いた。

ボーイズとガールズは耳を疑った。

「なっ何の冗談だよ！」

「あの子らを殺してこいって…」

「何考えてんだよ！」

ガールズも口をはさんだ。

「ちよっちよっと！何言ってるのよ！？」

「あまりにもヒドいですわ！」

「おい晴治！こいつらに変なこと教えんなよ！」

しかし晴治は聞いてはいなかった。

「悪役になりたい？悪になりたかったら殺人も経験しなきゃならねえぞ？」

すると、晴治は指をバキバキ鳴らす。

「中途半端な悪になるくらいなら絶対悪になりやがれ！さあやれるのかやれねえのかどっちだ？」

晴治の顔が本気^{マジ}になっていた。

「ううっ…」

しかし、ボーイズは動かない…。そりゃあそうだ。いきなり殺せと言われても、しょせんは「悪ガキ」である三人には許容範囲外の悪だったのである。

全くビビって動こうとしないボーイズに痺れをきらす晴治。

「もういいや：オレっちが見本を見せてやるわ。人殺しとはどんなのか：ガキ共自身でな！」

！ ！ ？

全員が驚愕した。晴治から夥しいほどの殺気が溢れている。ここまできると狂気だ。

「どっ…どうゆうこと！？」

「晴治君もしかして！？」

「やめろ！？マジでやる気かよ！？」

すると晴治は数枚の式神を取り出した。

ボーイズはワケが分からず硬直している。

「どっどーするつもりだ？」

「ブリック、逃げようよ！」

「あいつヤバイよ！」

晴治は式神を目標であるボーイズに定めた。
それに気づいたガールズはボーイズに呼びかける。

「あんた達早く逃げて!!、晴治はあんた達を狙っているのよ!!」
「どこでもいいから逃げろ!」

その言葉にボーイズは驚いて一目散に逃げ出した。

しかし、

「逃がすかぁ!このクソガキどもがあ!?!」

バシユ!

晴治は式神を放ち、逃げ出した三人を囲むように式神を配置した。
ブン!

囲んだ三人周辺には透明のまくが展開する。

「なっなんだこれは!?!まっ前に進めない!?!」
まくが壁みたいに頑丈に固く、ボーイズは完全に閉じ込まれてしまった。

「てめえ!何しやがった!?!」

ブリックが叫ぶと晴治はこう答えた。

「お前らには教えてなかったな。これは式神っていつてな紙とかを
使って命を吹き込み、オレっちの思い通りに行動させる技っちゃ。
オレっちがしたのはその式神を使って、お前ら周辺に結界を張った
のさ!」

! ! ?

「あんた!あの子らをどうするのよ!?!」

ももこが尋ねると、晴治はニヤニヤしながらいった。

「決まってんじゃない？ あいつらを『殺す』！」

！ ！ ！

晴治の言葉に全員が驚愕する。

「殺すとかバカなマネはやめなさい！ あんな悪ガキだけど命は命よ！？」

「それだけはやめて！ 晴治君落ち着いて下さい！」

「マジやめねえとオレらも黙っちゃいないぞ！」

ガールズは必死に説得するも、晴治は聞いていなかった。

「うるせえ！ オレはな中途半端な奴は大嫌いなんだ！ 殺してえ程にな！」

あいつらはどうせ敵なんだろう？ なら倒せて一石二鳥じゃねえか？ 東京CITYを平和にするじゃねえのか！？」

あまりにも傍若無人な振る舞い。いつものヘラヘラした晴治とは全く打って変わっている、鬼のごとくキレた晴治がいた。

一方、ブリック達も結界に閉じ込められて慌てていた。

「オイラ達をどうするんだよ？」

「そうだそうだ、こんなところに閉じ込めちゃって、僕ちゃん泣いちゃうぞ！」

すると晴治は何やら構え出した。

「今からその結界内に気を送り込む。ガールズにはちよつとだけ勉強タイムだ。」

「えっ！？」

「君ら、電子レンジの仕組みって分かる？」

? ?

「わっ分からないわよ!?!」

「それと今しようとしてることで何の関係があるんだよ!?!」
「ももことかおるは答えられなかったが、みやこだけが…」

「もしかして…」

「ばっバブルス?もしかしてわかったの!?!」

「はっ早く晴治君を止めて下さい!考えが正しければ今から惨い事が起こります!」

「なっ何い!?!」

晴治はみやこを見て、ニヤリと笑った。

「豪徳寺は気づいたようだねえ。」

今からすることは残酷極まりない殺し方をやる!」

! ? ?

「今から、その結界に風水で高めた気を送り込む。その気は結界内で乱反射し、そうすることで気はマイクロ波の役目を果たし、結界内は急激に温度は上昇、水分は蒸発し、つまりあの結界内は巨大な電子レンジの出来上がりだ!」

! ! ?

「なっなんだと?」

「そうになったら僕ちゃん達は…」

「そうだな、体中の体液は全部沸騰してそこから焼けつくように苦しめ、次に体が腫れ上がって最終的には“ボン!”かな?」

! ! ?

全員は驚愕した。ガールズ達は武器を構えだした。

「今すぐ晴治を止めるのよ！倒せないけど足止めぐらいはしないと！？」

ガールズは速攻で晴治に攻撃にかかる。

「ん？ちよつと大人しくしてもらおうか？」

晴治はその場から離れて、結界の近くに移動した。

すると晴治は身につけていた五芒星のピアスとリストバンド2つを外して空に放り投げた。

シュシュ！

手を複雑に動かして、右手を上空に上げた。

「修羅、羅刹招来！」

するとピアスとリストバンドに何やら青い炎が発生し、纏う。それは段々と何かの形になっていく。その形とは…。

「ちよつ…こつこれって…」

「まさかのまさか…」

「でたああああ！！！」

あの男勝りのかおるらしからぬ悲鳴を上げた。

「キシヤアアア！！！」

「グガアアアア！！！」

現れたのは卓越した筋肉、異なる色の体、恐怖を具現化したような禍々しい顔、そして頭上に生えるは空高く突き出る角。

そう…そこに現れたのは日本神話に登場する三匹の巨大な怪物『鬼』の姿があった。

ひ い い い …！！！！

全員が悲鳴を上げる。鬼なんて初めて見たものだから恐怖なんてもんじゃない。特に、お化けや幽霊などに弱いももこやかおるにとつ

ては姿だけでも充分すぎる程の攻撃だった。

「こいつらはオレっちの本当の式神だ。オレら陰陽師にとって鬼とは関わりの深い存在、なら鬼を呼ぶのも朝飯前なんだよ!」

すると晴治はガールズの方に指を指した。

「お前ら、あの三人を捕らえろ! 捕まえてくるだけでいい、それ以外は何もするな!」

すると鬼達はガールズに向かった。

「たっ助けてえ!？」

「オレはこうゆうのイヤなんだよお!」

こうゆうのは苦手な二人は一目散に逃げ出した。

しかし、鬼達は二人を逃がすハズがなかった。

ガシッ!

鬼は超高速で移動し、二人の腕を掴んだ。

そして:

「いやああん! 離して!!」

「捕まっちゃいましたあ:」

「離せよう!」

結局三人とも捕まってしまった。鬼達の力は凄まじく、ガールズの力では歯が立たなかった。

「そこで大人しくしときな。さて、ならやるか?」

晴治はブリック達を睨みつける。

「お願いだからここから出してくれえ!」

「オイラ達は何をしたって言うんだよ!」

ブリック達が訴えるも晴治は右手をブリック達に向けた。

「おめえらは敵だろ？ならば消すまでだ。
実際、お前から人とは違ったオーラを感じる。さては、モンスター
の類いか？」

「オレ達はモジ：ママに造られたんだ！」
「そうだよ！この女達の物を材料で生まれたんだよ！」

それを聞いた晴治は一瞬、黙り込んだ。
うるせえ：ピーチクパーチク：喋
りやがって：：。

！！？

「あつ：あんた：！？」

「あいつの顔！？」
晴治の顔が血管が浮き出て、目が血の色に染まっていた。まるで『
鬼』のように：。

それを見た全員が一気に血の気を引いた。
いつもへらへらしている晴治がいつもとは違う。あまりの変貌ぶり
に恐怖を感じた。

「ママあゝ！助けてえ！」

「うわああああん！！！」

あまりの恐怖にブリック達は泣き出してしまった。今まで感じたこ
とのない恐怖、それがボーイズに伝わったのだった。

「死ね：そして醜い姿を露呈しやがれ！」

ビッ！

晴治は人差し指と中指を合わせて、結界の方向へ指した。

“ 暗獄沸煮殺 ”

「やめてええ！」

ガールズが叫んだ。辺りは静寂な空気が流れ込む。

「なっ何にも起きないね…」

「さっきのは嘘…」

「あいつら助かったの…か？」

しかし

「君らの目は節穴か？あれを見る？」

「えっ!？」

すると

ボコボコっ!!

ボーイズの体に異変が発生した。皮膚から何かが飛び出しそうに膨れ上がっていた。

「あがあっあが…」

「うるええお！」

「えがあああっ！」

技は発動していたのだった。あの結界内は巨大な電子レンジと化したのだった。

「いやあああああ！」

「うっ…うぷっ！」

「やめてくれえええ!!！」

ラウディラフボーイズ死す！陰陽風水師の狂気の力！？ **その2（前書き）**

前と同じく残酷描写があるの注意を。

あと変な印象を与えるかもしれませんので先に謝っておきます。

ラウディラフボーイズ死す！陰陽風水師の狂気の力！？ その2

ボーイズの体が異常に腫れ上がっていく。まるでボールのように…。

「いやああああ！やめてええ！！」

「……………」

「晴治！今すぐ止めろ！さもないと！？」

かおるの声も虚しく、晴治は止めない。

「あばああああ！」

「マッ…マッ…」

「だずげでえ！」

ボーイズは焼けつくような地獄の中で苦しみもがいていた。ここま
で腫れ上がってしまうともう助からない…。

「何をしているんだ！？」

博士らが駆けつけてきた。

ガールズは博士に気づいて必死に訴えた。

「博士え！晴治を何とかして！あいつがボーイズを」

しかし

「なっ何っ…？これは…」

「おっ…鬼っ…？」

博士達は初めてみる鬼の姿に全身が震えあがった。しかし、今はそ
んなことをしている暇などなかった。

「そんなことより早くボーイズを助けてあげてっ！」

博士は晴治の方向を見ると、晴治の見る方向に見るにおぞましい地

獄絵図が展開されていた。

「あっ…ボーイズが…」

「晴治君！今すぐ止めるんだ！！」

ガシッ！

博士は晴治の腕を掴む。しかし、晴治の顔を見た瞬間…。

「なっ！？」

「お前らのその醜い姿が好きだよ…」

博士の顔は一瞬で青ざめた。晴治は一人でブツブツ喋り出した。

「お前らのその醜い姿、醜い顔、悲鳴、全てが可愛らしいなあ…俺の溜まりにたまったストレス、殺戮衝動がギンギンにエレクトシやがるうう！！」

よだれを垂らしながらその目は白目を向いて高笑いしているその顔はまるでキ○ガイ、狂人に当てはまるようなイカれた顔をしていた。そして、晴治は力強く指先に力を入れる。

次の瞬間！

ボンっ！ボンっ！ボンっ！

ビシャビヤ！ドシャ！ベチャ！

ボーイズはまるで風船が破裂したかのごとく、肉塊になり結界内で血と肉の塊が飛び散る。

……………。

その光景を見た全員が言葉を失う。

「ああっ…ああっ…」

「うっ…うぷっ」

「あぁっ…。」

全員の反応は違った。凄惨な光景に立ち尽くす者、吐き気を催す者、さらに恐怖の余り、へたり込んでしまう者、それぞれがこの凄惨さに立ち尽くした。幸い、人が逃げて誰もいなかった。

そんな中、晴治ひとりがあの現場に向かう。そして肉塊になって動かないボーイズ『だった』モノに見つめた。

パチン！

晴治は指を鳴らすと結界を張っていた式神が結界を解き、晴治のポケットに入った。

「……………」

見つめたまま、何も言わない。

パチンっ！

また指を鳴らすとガールズを掴んでいた鬼達の手がひらいた。ガールズはその場でへたり込んで放心状態になっていた。
すると晴治はこう言った。

「鬼達、これを残さず食べてくれ。血の一滴すら残さないようにね」

「グシャアア！」

ガツガツ！ゴキッ！ブシャ！

鬼達は大喜びで肉塊にかぶりつく。 3匹もいるため、すぐになくなった。

「いい子らだ。もういいぞ。」

すると

シュン！

鬼達は姿を消し、ピアスとリストバンドに戻った。

「さて…」

晴治は3人の元を向かった。そしてももこに手を差し伸べた。

「大丈夫か？」

しかし

パチーン！

晴治の手が弾かれる。ももこは物凄い顔をしていた。

「あんたなんか…あんたなんか…」

「……………」

全員が同じ気持ちだった。必死の訴えも聞かず、ボーイズを殺してしまっただから…。

晴治はニコリと笑った。

「それでいい」

「えっ？」

晴治は後ろを向いた。

「オレっちはな、それ以前にもう何人か殺してんだ。そう思われても仕方ねえよ」

！　？　？

全員が驚いた。何人も殺しているってどうゆうことか…。

「オレっちは昔から『鬼の子』と呼ばれているんだ。

さっきのオレっちを見たら？それが『鬼の子』と呼ばれる由縁だ。それじゃあ帰るわ。じゃあな」

晴治はそういうと去っていった。

「だっ大丈夫か？（ですか？）」

博士達がガールズに駆け寄った。

ダン！

かおるは地面に拳を打ちつける。

「なんなんだよあいつは…っ！良心もないのか…」

みやこは放心状態、ももこは博士に泣きついていた。

ケンとピーチもみんなを慰める。

「晴治君、君は一体…」

今日の出来事は何一つも良いことはなかった。それどころか凄惨な結末を迎えたのだった。

鬼の子 その？（前書き）

この小説自体が自分の解釈なのであんまり気にしないで下さい。

鬼の子 その？

あれから数日が過ぎた。

ももこ達はあの出来事以来、晴治を避けるようになった。

しかし、晴治はいつも通りの調子である。

ある日の放課後、晴治はいつも通りに1人で帰ろうとしていた。
すると

「ツラかしな？」

「？」

突然、この上級生に呼ばれ、体育館の裏に呼ばれる晴治。

「お前、最近もの凄く調子がいいらしいな？」

その言葉にピクツと反応する晴治。

「だから何ですか？それがいけないとでも？」

すると上級生が怒りを爆発させる。

「お前のやっтерることがみんな大迷惑してんだよ！！わかってんのか？」

すると晴治は呆れて笑いをこぼした。

「なら僕ちゃんに構わなかったらいいコトでしょ？」

迷惑って思うから迷惑なんじゃないですか？」

あまりにもナメた態度、反省しない態度、それが上級生の起爆剤となった。

「もういい！わかんねえようなら体で分からせてやれえ！」

「ああ！」

上級生達が晴治に一斉に襲いかかった。しかし晴治はニヤニヤしていた。

そんなに痛い目にあいたいなら死ぬほど あじあわせてやる。

.....

次の日、学校中が大騒ぎになっていた。学園の中等部で下級生と上級生と体育館裏で喧嘩して、上級生達がボロボロに変わり果てた姿で倒れていたというのだ。

犯人はというと...

キーン先生がクラスにこう述べた。

「昨日の放課後、晴治君とこの上級生といざこざを起こして停学処分を受けました。」

その言葉にクラス中が騒然と化す。

「あいつ、やっちまったな...」

「まあ、あいつと関わらなかったしいんじゃないね？」

そんな声が聞こえる中、ももこ達はドキッとしている。

「先生、晴治君は大丈夫だったんでしょうか？」

すると1人の女子が質問する。彼女は水城愛美、クラスの中では控え目な子だった。

「晴治君は何ともなかったんですが...上級生の方はかなり酷い状態らしくて...」

「そっ...そうですか...」

愛美はそうゆうと静かに座った。

「私も晴治の家に訪問に行くから、みんなは心配しなくていいですよ。また彼が早く学校へ戻ってくることを願いましうね」

放課後、帰ろうとしていたももこ達の所へキーン先生が来る。

「あなた達今日、晴治君の所にこれを届けて欲しいの」

「えっ!？」

「何であたし達が？」

「ごめんなさい、今日用事が入っちゃて行けなくなっちゃったのよ? 聞いた話によると君達は晴治君と関わったことがあるらしいわね? だからあなた達ならって思ってた…」

ももこ達は封筒を渡され、しぶしぶ引き受けた。

「なんであたし達が…」

「まあ先生の頼みですから…」

「ん? あの子は…」

ももこ達は玄関に晴治の下駄箱を見てため息をつく愛美の姿を見た。

「あれ、水城さん? こんな所で何やってるの?」

突然の声にビクッと反応する愛美。

「はっ…赤堤さん達、なんでもないよ…ははっ…」

愛美はそそくさと去っていった。

「?」

「どうしたんでしょうか?」

「そんなコトより、これをあいつんちに持っていこうぜ。
今日は見たかった野球の試合があるんだ」

そういうと3人は晴冶君の家に向かった。三人は晴冶の家など知らなかったが先生が地図を書いてくれたのを頼りに向かった。

「地図だとこの辺り何だけど？」

「もしかしてここじゃねえか？」

かおるが一軒家をさした。古臭いが家はかなり大きかった。

「ここが晴冶の家ね？結構大きいよ」

「借家ですね？」

「なんか出そうな所だな…。」

ピンポン

とりあえず、三人はチャイムを鳴らした。

しかし

「…誰も出てこないね…」

ピンポン…

もう一度押したが一向に出てくる気配がない。

「誰もいねえんじゃねえのか？」

「どうしようこの封筒？」

三人が困っていた矢先に

「何してんの？」

！　　？

ももこ達は驚き、上を見た。すると二階の窓から晴治が顔を出していた。

「晴治！？ いるなら出てきなさいよ！」

「全くだす！」

「わりい！？ 聞こえなかった。ここのチャイム壊れててさ？ 中は聞こえねえんだよ」

そういうと晴治はすぐに二階から降りてきた。

ガラガラっ

「よお。一体何のよう？」

「これをおんたに届けにきたのももこは晴治に封筒を渡した。」

「ふーん…ごくろーさま♪」

「あんた上級生と何してんのよ？」

晴治は無言でこういった。

「何か呼ばれて襲いかかってきたからブチのめしたただけだけど？」

ガクッ…

三人とも肩を落とす。

「あんた加減で言葉知らないの？」

「とりあえず転校生なんだから大人しくしとけばどうだ？」

「死ななかった辺りが手加減したつもりだけどね？」

ガクン…

三人はさらに肩を落とす。

すると

「あら、あなた達は？」

振り向くとそこには綺麗な女の人が立っていた。

「ちっ：帰ってきやがったか：ふん：」

晴治は突然不機嫌になり、そっぽ向く。

「こんにちは」

ももこ達は挨拶をすると女の人は笑顔で返す。

「こんにちは。私は晴治の母です。よろしくね」

すると晴治がその場から去っていった。

「あれ、晴治は？」

「さっきまでいたのに？」

すると

母親は少し苦笑いをした。

「ごめんなさいね。あの子、かなり変わった子だから…」

その言葉にももこ達も納得する。しかし、

「いっいえ：そんな事はないですよ」

すると

「今からお茶を入れるし上がっていきなさい」

しかし、三人は顔を横に振る。

「いっいえ：滅相もないです」

「あたし達は先生から預かった物を届けにきただけですから…」

しかし、母はニコニコしながら返す。

「あら、そんなに気を使わないで。あと人の好意は素直に取っておきなさい。」

「……………」

結局三人は晴治の家に上がった。三人は居間に案内された。

「ねえ…ここにあるものって…」

「うん…」

居間には変なお札や線香、さらにお祓いに使いそうな物が至る所に飾ってあった。陰陽一族らしい家だった。

すると母親はお茶を持って出てきた。

「周りはちょっと変なものばかりだけど、気にしないでね？」

「「「はい」」」

三人はお茶を頂いた。

するとみやこが母親にこう言った。

「あの…晴治君のこと何ですが…彼ってどうゆう人なんですか？」

すると母は少し間を置き、話だした。

「あの子はね…あたし達が陰陽道っていうようは呪い師みたいなものの一族って知っているかしら？」

「はい！あいつは自分で陰陽師って言ってました。何でも安倍晴明の子孫とか何とか…」

「そう…。確かにあたし達は安倍晴明の子孫で、今も家族は陰陽一族よ。」

晴治はその中でも能力的には安倍晴明に最も近い子と言われたのよ」

何か訳ありみたいない方に、ももこ達は最も聞いてみることにした。

鬼の子 その？

.....

元々、陰陽師は当時の位は低いものの、その信憑性の高さとその神秘性から、天皇から重要視されてきた存在で、能力の高い陰陽師はそれだけ人々から崇拝されることが多かった。

現代でも陰陽師は総理大臣等のお偉方からお祓いを頼まれることもあり、政治とも何らかの関わりが深い。

さらに、陰陽師は暗殺等の闇仕事もできるため、人を殺してもお偉方からそれを揉み消してもらうのも容易い。

しかし、それだけ輝けば闇があるのも忘れてはならない。

その神秘性は覆せば化け物扱いにされ、人々から忌み嫌われることも多い。

.....

「私は昔は巫女、今は専業主婦、主人はサラリーマン兼陰陽師。代々そういう家系では血筋を絶やさないためにそういう者同士が結婚するしきたりなの。」

晴治はね…そんな家系に生まれて、非常に高い潜在能力を持っているの。あたし達は別名『鬼の末裔』と呼ばれるの」

「おっ鬼の末裔？」

「鬼って晴治も出してたよな」

それを聞くと母親の顔は悲しくなっていく一方だった。

「鬼というのは、『隠』の訛語で『隠れ住む人々』って意味なの。ようは人々からあまり知られてはいけな一族で忌み嫌われる存在。能芸者や祈祷師達も鬼の末裔が多いの。」

晴治はそんな一族に生まれて、ゆえ人々から忌み嫌われてきたの」

！ ！ ？

「なっ何ですって…？」

「それじゃああいつは…」

母親は晴治について話出した。

……………

晴治はその出生で、物心がついた時から陰陽道の英才教育を受けた。その物覚えの速さは群の抜き、「安倍晴明の再来」とまで言われた。しかし外に出てしまえば人々から「鬼の子」と呼ばれ、石を投げられたり、いじめられたりされたそうだった。

晴治も元々は泣き虫で甘えん坊であった。しかし、ある日を境に変わってしまったのだと言う。

……………

ももこ達はそれを聞いてシユンとなった。

「あいつに…そんなことがあったなんて…」

「酷い話です…」

するとかおるがこんなことを言い出した。

「あいつはなんか取り憑かれているんですか？最近の行動を見て思うんですけど？」

「えっ？どういうこと？あなた達、ちょっと話してくれる？」

ももこ達は今までのことを全て話した。

「…そう…そんなことがあったなんて…」

母親は悲しい顔をしていた。

「あのう…晴治について教えてもらいませんか？一体何があったのか？」

「……………」

母親はももこ達に全てを打ち明けた。

……………

それは晴治が6才の夏の時だった。

ある日、小学校から電話があり、晴治が同級生数人を殺害したというのだった。

母親はすぐに送還された警察に駆けつけた所、晴治はいつもの晴治ではなかった。

そこにいたのは目が充血し、奇怪な笑いをして、よだれを垂らして拘束された鬼のような顔をした晴治の姿があったという。

後に脳内検査をした所、脳に異常が発見された。

……………

「私と主人は悪霊に取り憑かれたと思い、すぐにお祓いをしたわ。私も昔は巫女だったからお祓いぐらいなら出来たの。しかし晴治は治らなかったの。」

「……………」

三人は愕然とした。
すると

「でっ、何が言いたいんだ？」

！
？

後ろを向くと晴治が腕組みして立っていた。

「せ…晴治!？」

「あっあんた、聞いてたの？」

晴治は不機嫌そうな顔をしていた。

「オレっちをこんなにしたのはあんたじゃないか。覚えてるよな、6歳の時のことを」

「はっ……。」

母親は何かに気づき、黙り込んだ。

「なにがあっただ!?」

「君らに教えてやろう。オレっちをこんなにしたのは全部こいつらのせいだ!!」

晴治は母親に指を指した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9913k/>

パワパフガールズZVS謎の風雲児

2010年10月10日03時25分発行